

ヨーロッパの仲間入り

イングランド史におけるノルマン・コンクエスト理解をめぐる

中村 敦子

はじめに

日本でイギリスと呼ばれ、その歴史はイギリス史として知られてきた国がある。イギリスは日本人がもっとも親しんでいる国の一つではないだろうか。ところが、親しみよく知っているはずのイギリスは今、「イギリスとは何か」として自らのアイデンティティをホットに議論しているのである。この「ブリティッシュネス」や「ブリティッシュ・アイデンティティ」をめぐる問題に関してはすでに様々な紹介や議論があり、本報告の背景となっている¹⁾。その詳細に立ち入る余裕はないが、ここでは密接に関わる一つの視角として集団のアイデンティティ形成に大きな役割を果たす「過去の経験」を取り上げてみたい。ある集団が求心力を持つには、その枠組みに所属意識を持つ必要がある。その際、過去の経験を共有しているという意識は一つの力となるだろう。その過去の経験が軍事征服である場合、現在を生きる人々にはどのような解釈が可能だろうか。それは何をもちたらし、破壊したのか。過去の勝者と敗者のどちらが自分たちの「先祖」となったのだろうか。

さて、本報告で取り上げるのは、1066年のノルマン・コンクエストという事件である。すなわち、ノルマンディ公ウィリアム率いる軍が1066年10月、ヘイスティングズの戦いでイングランド軍に勝利し、イングランドにノルマン朝を開いたという歴史的な事象である。イングランド中世史のみならずイングランド史上もっとも有名な出来事の一つであり、そして900周年を越えてなお、ますます盛んに議論されている出来事でもある。ブリテン島は古代から中世にかけて外部からたびたび侵入を受けてきたにもかかわらず、the Conquestとしてノルマン・コンクエストは特別の地位を与えられてきた²⁾。それが成功した征服の最後のモ

のであり、後のイングランド国家の方向性を決定づけたと考えられてきたからである。必然的にその意義をめぐってノルマン・コンクエストは数多くの議論を生み出してゆく。まとまった研究史としても、D・C・ダグラスによる1946年の論文から最近のM・チブナルによる1999年の書物にいたるまで、すでにいくつかの研究が発表されている³⁾。なかでも、ダグラスによる「ノルマン・コンクエストとイギリスの歴史家たち」は、最初にノルマン・コンクエスト研究史を歴史家たち自身の社会的背景と関連づけて検討した論文として注目される。ダグラスが強調したのは、この事件がどれほど注目を集めてきたかだけでなく、それらの議論が、歴史家たち自身が著述していた時代の環境にいかにか影響されてきたかという点であった。政治家、法律家、パンフレット作者や巷の物書きたちが、彼らが特に関わりをもたないように思われる主題 - 11世紀の政治的危機 - について、何世代にも渡って激しい論争を繰り広げてきたのは驚くべきことである、とダグラスは述べている⁴⁾。

筆者が今回の報告で試みたのは、豊かな（そして錯綜した）ノルマン・コンクエスト理解の歴史をある視点からたどること、すなわち、イングランドがヨーロッパとの関係をどのように捉えてきたのかを映し出す鏡とすることであった。まず、ノルマン・コンクエストを「外部」による征服と理解するなら、前提としてイングランド自体を一つの統一体とみなす見方が存在するはずであり、一方、征服に成功した「外部」は、ノルマンディかあるいはフランスか、それとも大陸ヨーロッパ世界なのかという問題がある。D・キャナダインが端的に指摘するように、イギリスの自己理解においては大陸ヨーロッパとの関係が大きな役割を果たしてきた。キャナダインによれば、現代イギリスでは多くのイギリス人が「ヨーロッパ」と乖離し、「ヨーロッパ」より優れているとはもはや感じていない。…その歴史上ほとんどの時代、「ヨーロッパ」とは異なり、例外的で、何かしら優れているものとして自らを定義してきた国民にとって、これはまったくトラウマなのである⁵⁾。ノルマン・コンクエスト理解のなかには、多分に大陸ヨーロッパとの関係性のなかで構築されているイングランドのアイデンティティのありかたが映し出されているのではないだろうか。

ここで本報告の視野を限定しておこう。現在の「イギリス」すなわち連合王国を対象にするのであれば、スコットランド、ウェールズ、北ア

イルランドを含めるべきだが、ここではイングランドを対象にする。最初にノルマン軍の征服を受けたのはイングランドであり、上述の地域は後にアングロ＝ノルマン王国の侵入という形で影響を受けてゆくことになる。従って、本報告ではノルマン・コンクエストがイングランド史にもたらした意味がどのように解釈されてきたかという点に限定しておくことにしたい。また、この時代を扱う際、人名については英語読みかフランス語読みかで悩まされるが、ここでは英語読みを中心にしている。

1. ノルマン・コンクエストはどのように扱われてきたか

中世初期イングランドの代表的な年代記『アングロ＝サクソン年代記』は、1066年について以下のような記事を残している。

1066（ヘイスティングズの戦いの後）ウィリアムは軍を率いて荒らしまわった。…彼は戴冠の後、もし人々が忠実ならば、この国をかつての優れた王たちのように支配すると誓った。しかし彼は厳しい税を課した。いたるところに城を建て、人々を苦しめた。…その後すべては悪くなった⁶⁾。

一方、ノルマンディ公ウィリアムのそばに従い、彼の偉業を讃える記録を残したウィリアム・オブ・ボワティエは、ノルマンディ公ウィリアムがいかに王として望まれたか、正しい支配を行ったかを述べる。

ウィリアム公とその軍は、イングランドの都市をたった1日で支配した。彼は謙虚に振舞い、慈悲をもって支配することを好んだ。人々は自ら服従し、代表者たちがやってきてウィリアムにイングランド王になってくれるよう頼んだ⁷⁾。

征服者、支配者として侵入してきたノルマン側と、敗北者、被支配者とならざるを得なかったイングランド側が異なる感覚を持ったのは当然であろう。ノルマン・コンクエスト後の叙述において、ノルマン側では、征服の成功の称賛とウィリアム征服王による王位継承の正当性の主張が中心を占める⁸⁾。人々は現実のノルマン人支配に直面し、それをイングランド社会の墮落に対して神が下した正当な罰であるとして理解した。退廃したイングランドがノルマン・コンクエストによって改革と秩序をもたらされたとするのである。ノルマン側にとっては征服の成功の裏づけであり、イングランド側にとっては厳しい圧制であってもウィリアム

の支配に従わざるを得ず、この理解は双方にとっての現実の合理化であった。しかし、イングランド側には全面的に賛成できないこの構図は、アングロ＝サクソン時代のはるかな過去の栄光を讃えることで乗り越える試みがなされる⁹⁾。征服後世代交替が進むうちに、誰がイングランド人であり、誰がノルマン人かは実際には混乱してゆく。だが、「イングランド人对ノルマン人」という区別は完全に消え去ることはなかった。混交が進み、イングランドに定着する人々が自らをイングランド人と認識する一方、豊かな支配者はノルマン人であり、貧しい被支配者はイングランド人であるという意識は消えることなく継続してゆくことになる¹⁰⁾。

近世に入ると、アンティークアリズムの動きに見られるように、過去への探求の熱心な動きが始まる。一方、現在の問題が過去に起源をもち、過去が現在の問題を解決するという意識が現れた¹¹⁾。はるかな過去の出来事であったノルマン・コンクエストは、現実的な意味合いをもって人々の認識のなかに甦ってくることになったのである。関心を集めたのは、ノルマン・コンクエストがアングロ＝サクソン時代の国制にどのような影響をもたらしたかという問題であった¹²⁾。人々は当時直面していた問題、すなわちローマ・カトリック教会との関係、法の歴史、そして王の権限の転換点をノルマン・コンクエストのなかに見出し、その起源を求めはじめた¹³⁾。内戦と革命の時代、ノルマン・コンクエスト理解は様々な形で利用されながらも、大きくは二つの政治的党派と結びつき、それぞれの現実的根拠として用いられるようになってゆく¹⁴⁾。

王室を支持する人々にとっては、ノルマン・コンクエストは輝かしい過去の偉業であり、ウィリアム征服王がまさに今のイングランド国家の栄光の基礎であった。ノルマン人とは支配者層を意味したのであり、貴族階級にとっては「ノルマン・コンクエストの際に渡ってきた」先祖を持つと主張することは、自身の家柄の古さや高貴さを示す人気のある指標となった¹⁵⁾。対して影響力をもったのが「ノルマンのくびき」説である。それによれば、過去のアングロ＝サクソン社会では自由で平等な人々が代表制によって統治していた。ノルマン・コンクエストによってそれらの権利が奪われ、異国の王と支配者たちによる圧制がもたらされた。しかし、人々は過去の記憶を維持し、失われた権利を取り戻す努力を続けるのである¹⁶⁾。ノルマン人の圧制に対しアングロ＝サクソンの過

去を美化するというモチーフは、征服直後からイングランド人の間で存在していた。それは近世に入り「ノルマンのくびき」説として甦り、実際の社会を動かす力を発揮するようになってきたのである。アングロ＝サクソンの過去を称揚し、その復活をめざす人々にとって、ウィリアム征服王は異国の暴君であり、ノルマン・コンクエストはまさに国家の悲劇であった。ウィリアムは外国人であり、教皇の支持を受けたフランスの征服者であり、外国人の団を率いてアングロ＝サクソンの優れた国制を覆して人々を奴隷に貶めたのである。彼らにとっては、現代イングランド人の先祖はノルマン人ではなく、アングロ＝サクソン人であった。そしてアングロ＝サクソンを支持する見方は強く生き残り、プロテスタント支持、議会支持と結びつけられてゆくのである¹⁷⁾。

大英帝国の繁栄を謳歌したヴィクトリア朝期は、ナショナリズムの昂揚をみた時代でもあった。ゴシック・リヴァイヴァルの動きのなかで中世が大人気を呼ぶ。そしてアングロ＝サクソン人を高く評価する動きは一般の間で大きな影響力をもったのである。当時大変な人気をよんだW・スコットの『アイヴァンホー』は、邦語にも訳されよく知られた歴史小説である。12世紀末のイングランドを舞台に書かれたこの物語は、自由と独立を掲げるアングロ＝サクソン人が支配者ノルマン人に抑圧されるという構図を背景に、アングロ＝サクソン人である主人公の活躍を描いている¹⁸⁾。この小説は、伝説でよく知られるロビン・フッドを、圧制をしく支配者ノルマン人に対抗するアングロ＝サクソン人の英雄として定着させることにもなった¹⁹⁾。あるいは、エヴリマン叢書に含まれているE・ブルワーリットンによる『サクソン最後の王ハロルド』は、ヘイスティングズの戦いの敗者ハロルドを正義の英雄として描き、対するウィリアム征服王を悪意ある侵略者としてその対立をロマンチックに仕立てあげた物語である。作者はアングロ＝サクソン人たちの美德を謳いあげ、彼らに対して同じイングランド人としての身近な共感を持ってほしいと訴える²⁰⁾。これらの著作は、ノルマン・コンクエスト以前のアングロ＝サクソン人を現在のイングランド人に直結するものと見なし、彼らに平等と自由と独立の精神をあてはめることによって、逆に19世紀当時のイングランド人意識に訴える役割を果たしたのである²¹⁾。

この時代は大学に歴史学講座が設置され、ドイツの影響を受けて近代歴史学が学問として成立する時期でもあった。ノルマン・コンクエスト

研究も、理論としての「ノルマンのくびき」説を越え、専門的歴史研究のテーマになった²²⁾。だが、学問研究のレベルでなされた議論においても当時のイングランドでの政治意識に基づいた歴史理解の対立を見ることが出来る。

19世紀のノルマン・コンクエスト研究に大きな影響をもった人物といえば、まずE・A・フリーマンの名を挙げなければならない。6巻にも及ぶ膨大な歴史叙述である代表作『ノルマン・コンクエスト』をはじめ、数多くの著作や記事を著し、オクスフォード大学の教授となった人物である²³⁾。しかし、フリーマンの壮大な中世イングランド研究に対してはJ・H・ラウンドが厳しく攻撃し、双方の支援者たちを巻き込んだの応酬となったことは研究史上よく知られている²⁴⁾。フリーマンはアングロ＝サクソン時代の社会体制が征服以後も継続し、ノルマンを吸収しつつ偉大な国家へと成長したと主張した。ノルマン・コンクエストの重要さは「イングランド史の始まり」としてではなく、転換点にある。いわゆる連続説である。対してラウンドは征服前後での体制の断絶を主張した。トーリを支持し、強力な中央権力と秩序を重んじた彼は、アングロ＝サクソン社会末期の過度の自由と無秩序に対し規律をもたらしたのがノルマン・コンクエストであったと考えたのである²⁵⁾。トーリにとっては、ウィリアム征服王は現在の王室の祖先としてイングランドの最初の偉大な国王であり、ウィリアム征服王に従った者たちは現在の貴族たちの直接の先祖であった。さらにノルマン・コンクエストを大英帝国の発展につなげる理解も現れる。イングランド王であるウィリアム征服王が、イングランドだけでなく海外に支配を広げていたという点が重視され、まさにヴィクトリア女王の帝国の出発点とさえ考えられたのである²⁶⁾。だが、反フランス主義思想を持ち、議会と自由を重んじ、ナショナリズムを賞揚するフリーマンは、イングランド議会の直接の起源を賢人会議のなかに求め、アングロ＝サクソン社会にホイッグの基礎を見出した。そして、大陸フランス出身の新たな支配者層は、アングロ＝サクソンの社会体制にすぐに吸収され、イングランド国家が復活したと主張したのである²⁷⁾。

こうして近世以降、ノルマン・コンクエストを現在の問題につなげ、そしてアングロ＝サクソン（イングランド）対ノルマン（フランス）という構図が定着してゆく。ナショナリズムと結びつけられたアングロ＝

サクソン意識はその後強い力を持ち続けることになった。19世紀に入っても、フリーマンとラウンドの対立に見られるように、ノルマン・コンクエストの理解は統一されることはなかった。だが、起源をアングロ＝サクソンに求めるのであれ、ノルマン・コンクエストの影響に求めるのであれ、ノルマン・コンクエストは「偉大な国家イングランド」の歴史における重要な転機と理解されてゆくのである。

2. 現代イングランドはノルマン・コンクエストに何を見出すか

次に、20世紀、とくに後半の動きを取り上げたい。歴史学全般の研究対象の拡大にともない、ノルマン・コンクエスト研究もそれまで中心を占めていた国制史、政治史、とくに封建制に関する問題から一挙に多様化することになった。今では美術、建築、あるいは言語や文化的視点を含め、複合的で多面的なアングロ＝ノルマン時代像が描かれるようになってきている。

この時期の動きに関して注目したいのは、20世紀半ばに見られるノルマン・コンクエスト理解の視座の変化である。1966年にはノルマン・コンクエスト900周年を経験し、ノルマン・コンクエスト研究はさらに活況を帯びると同時に、大きな転機を迎えたといってもよいだろう。この変化とは、ノルマン・コンクエストという歴史的事象が、イングランド史の文脈 - イングランド史のみの文脈 - から抜け出て、より大きな文脈、すなわち、全ヨーロッパ的視野のもとで新たな光を当てられることになったことである。

R・W・サザーンは「イングランドのヨーロッパ世界への初めての参加」と銘打った講演を1966年に行った。サザーンは古代、中世において「世界の外側」であったブリテン島が、ノルマン・コンクエスト以降、初めてしっかりとヨーロッパ世界のなかに組み込まれることになったと述べる。そして、この講演においては、イングランドとノルマンディという対比でなく、イングランドとフランス、そしてヨーロッパという言葉が使われるのである²⁸⁾。後述する先駆的研究が示すように、この指摘自体はすでに革新的なものではなかった。だが、彼のタイトルは、まさに当時のノルマン・コンクエスト研究の発展の方向を象徴的に示していたといえるだろう。

20世紀半ばの変化と述べたが、きざしは20世紀初期に現れていたと言ふべきかもしれない。遡ることになるが、ここで先駆者としてアメリカ人研究者C・H・ハスキンスについて述べておきたい。『12世紀ルネサンス』や『大学の起源』などの文化史で著名なハスキンスだが、中世ノルマンディ研究においても重要な業績を残していることはよく知られている²⁹⁾。ハスキンスは、それまでイングランドのノルマン・コンクエスト研究者にはほとんど注目されてこなかった中世ノルマンディを対象に、フランスの古文書館を訪ね、実際に史料の検討に基づいた行政史の大著を発表した。彼の『ノルマン制度史』は中世ノルマンディ史においていまだ重要な著作であり続けている³⁰⁾。

だが本報告でより注目したいのは、彼のもう一つの先駆的著作『ヨーロッパ史におけるノルマン人』である。こちらの書物は、『ノルマン制度史』より一般向けに書かれた書物だが、そのなかで、ハスキンスはノルマン人をヨーロッパの国家形成者であり、ヨーロッパ文化への貢献者として描写した³¹⁾。ヴァイキングのノルマンディ定住からイタリア進出まで幅広くノルマン人の活動をたどったこの書物で、ノルマン・コンクエストは「ノルマンディとイングランド」という章において扱われており、ハスキンスによれば、ノルマン・コンクエストによってヨーロッパ世界の中心から離れたところにあったイングランドがノルマンディと結びつけられ、ノルマンディを通じてヨーロッパ世界の動きに巻き込まれることになった。そして彼が強調したのは、ノルマン人たちにとってイングランド征服は、彼ら自身の国家形成と拡大の動きの一つだった、という点である³²⁾。

ノルマン・コンクエスト研究をイングランド史の文脈ではなくノルマン人を中心として捉えるというハスキンスが打ち出した視点は当時斬新なものであった。しかし、この動きはすぐに主流となっていったわけではない。ハスキンスによるノルマンディ研究の発掘の意義は認められたが、英仏の学界の交流は豊かになったとはいえ、中世ノルマンディ史はフランス史の文脈でフランス人研究者によって研究され、ノルマン・コンクエストはやはりイングランド側の視点に立って研究されるという状態が続く。この軸の転換が学界においてより広く支持を集めるようになるにはさらに半世紀、第二次世界大戦後まで待たねばならない。

20世紀半ばからハスキンスの視点を積極的に受け継いで展開してい

ったのは、先に研究史分野での貢献を紹介したダグラスである。彼の『ウィリアム征服王』は、1960年代において、それまで「イングランド王」であったウィリアム征服王を、生涯の全体をたどりノルマンディ公としての側面を大きく取り上げた。ダグラスはフランスの学界との交流の成果を盛り込み、「アングロ＝サクソン・イングランドの敗北を慨嘆する」のではなく「ノルマンの偉業を描写する」方向をとったのである³³⁾。続く『ノルマンの業績』、『ノルマンの運命』などの著作に見られるように、ダグラスはノルマン人を主軸としてその活動のなかにノルマン・コンクエストを組み込んでゆく³⁴⁾。

ダグラスに続き、さらなる視座を展開したのは「ノルマン帝国」論を主張したJ・ル＝パトゥーレルである³⁵⁾。イングランドとフランスの間に位置するチャンネル諸島出身であり、英語とフランス語双方になじんでいたル＝パトゥーレルの視座は、あたかもイングランドにとってのみの歴史的事象としてノルマン・コンクエストを捉えがちであったそれまでの研究者たちとは当初から異なっていたと言えるかもしれない³⁶⁾。ル＝パトゥーレルは、ハスキンス、ダグラスのように、ノルマン・コンクエストそのものに注目するというよりノルマン人の拡大という視点に立つ。そして「ヨーロッパ的視野」のなかにそれらを配置するのである。ノルマン人国家において、その後の「アンジュー帝国」、ル＝パトゥーレルの言葉によれば、「プラントジネット・ドミニオンズ」においては、イングランドは一つの領域にすぎない。大陸フランスのノルマンディ、アンジュー、アキテーヌなどの「アンジュー帝国」の構成地域をイングランドの従属地域のように描き、「中世における大英帝国」のように捉えてきた伝統的な（そして無意識的な）前提を彼は批判したのである³⁷⁾。

中世ヨーロッパ世界全体の大きな動きのなかにノルマン・コンクエストを位置づけるという方法は、イングランドにのみ視点をおくのではもちろんなく、またノルマン人の活動にのみでもなかった。現在では、ル＝パトゥーレルが対象とした国制史的テーマを越え、研究はより多様な側面における社会変化を分析する方向に向かっているが、そこではノルマン・コンクエストの時代の社会的・文化的変化が当時のヨーロッパ世界全体の動きのなかに有機的に位置づけられようとしている。

当時の学界でのノルマン・コンクエスト研究の発展には、900周年である1966年を迎えての意識の盛り上がりがあった。1966年前後には多

くの記念講演がなされ、D・ホワイトロックらによる『ノルマン・コンクエスト』をはじめ、ノルマン・コンクエストとその時代に関する様々な論文や著作が公刊された³⁸⁾。これらの主たる目的は、研究史や当時の研究の最前線をコンパクトにまとめることであつたが、同時により広い読者、聴衆にノルマン・コンクエストを意義づけることも意識されたためか、背景に1960年代の社会を照らす微妙な表現をしばしば窺うことができる。例えば、前述の『ノルマン・コンクエスト』のイントロダクションでは、「1066年にイングランド国家が敗れたことを祝うのではなく、我々の国家に新しい要素が加わったことを記念するのである。イングランド人とノルマン人、そしてフランス人の血は混ざっており、両方の父祖を讃えよう」とわざわざ訴える³⁹⁾。また、H・R・ロインは、1966年の記念講演を振り返り、ヘイスティングズの戦いを「我々の側の敗北」と言う一人の聴衆を印象深く思い出している⁴⁰⁾。R・A・ブラウンの1966年の講演は、ノルマン・コンクエスト研究の背景も視野に入れた形でまとめられたものだが、そこで彼は、ノルマン・コンクエスト研究がいかになクロニスティックなナショナリズムによって影響されてきたか、そしてそれはまだ消え去ってはいないのではないかと指摘した。ブラウンは「ノルマン・コンクエストはイングランドを同時代の大陸本流の発展の流れに乗せた」と評価し、「今、単一市場に是か否かにかかわらず、参加することでなんの変化もないふりはできない」と主張する⁴¹⁾。

20世紀末を迎えても、「我々イングランド」を直接アングロ＝サクソンに投影する傾向は失われてはいなかったようである。D・ベイツは1989年の『ウィリアム征服王』の序文で、ウィリアム征服王がいまだヘイスティングズの戦いで母国イングランドを打ち破った異国の征服者であると理解されがちではないか、との感想を述べた⁴²⁾。ノルマン・コンクエスト研究史をまとめたアメリカ人研究者J・M・カーターによれば、イングランド人（研究者）にとっては、ノルマン・コンクエストはまさに彼ら自身の国家の問題なのであり、外部の研究者は個人の所有物に踏み込むかのような感覚をもってしまう⁴³⁾。カーターは、イングランド史において重要であるのは言うまでもなく、イングランドの政治や文化にその後影響を受けた地域を中心に世界的な影響をもった事件であると続けるのだが、このコメントの前半部分は、イングランドの歴史家

が自らの存在の根本に関わる問題としてノルマン・コンクエストを取り扱うという感覚をとらえた他者の目を示唆しているだろう。ノルマン・コンクエストが持つ「ナショナルな」事件としての感覚の重みを感じさせる表現である。

最後に、ノルマン・コンクエストがイギリス社会にどのように受け止められてきたかを象徴的に表す例として、研究文献が非常によく利用するセラーとイエーツマンによる書物『1066年とそのすべて』を紹介しよう。そこでは、以下のように述べられる。1066年は、イングランドの歴史において「ウィリアム征服王、1066年」として記憶すべき年である。ノルマン・コンクエストによってこれ以後イングランドは征服されることなく、最高の国家に成長したからである、と⁴⁴⁾。この書物は、イングランド史の「伝統的」理解、すなわち「イングランドがいかに偉大な国家となったのか」を学ぶのが歴史教育であるという理解をパロディ化したものであり、歴史研究の専門書ではない。しかし、風刺にせよ「覚えるべき年号」としての1066年をタイトルとし、「それによってイングランドは最高の国家となった」と皮肉を言う本書は、逆に、ノルマン・コンクエストがイングランド史のなかでいかに大きな意味を与えられてきたかをよく示しているだろう⁴⁵⁾。

歴史家がノルマン・コンクエストのなかにヨーロッパ世界に組み込まれていくイングランドを見る一方、「アングロ＝サクソン・イングランド＝我々」対「外部 - ノルマンディ - フランス - 大陸ヨーロッパ＝彼ら」という古くからの構図は、現代社会のなかでいまだ生命力をもち続けているのかもしれない。

おわりに

ノルマン・コンクエストは、自主独立と平等を享受したアングロ＝サクソン国家が異国の侵略者に征服された悲劇か。あるいは、大陸の進んだ封建社会が原始的なアングロ＝サクソン社会に導入され、国制上の画期的発展がもたらされた輝かしい出来事なのか。より客観的な見方をとるなら、連続か断絶か。長い間議論は大きくはこの二つの間を揺れ動いてきた。現代では完全にどちらかに立つ見方をとることはなく、個々の分野での連続、断絶、あるいは融合が指摘され、より複合的な見方で影

響を捉えるようになっていく。

どちらの見方をとるにせよ、議論は主として「イングランド国家が異国の侵入者によって征服された事件としてのノルマン・コンクエスト」という枠組みのなかでなされてきた。だが、20世紀後半に入り、枠組みは広がってゆく。ノルマン・コンクエストという歴史的事象は中世ヨーロッパ史全体のなかに有機的に位置づけられるようになってきたのである。

最新のノルマン・コンクエスト研究史『ノルマン・コンクエストの議論』のイントロダクションで、アングロ＝ノルマン史の大家であるチブナルは言っている。「どんな時代も、その時代における国制的、社会的あるいは文化的問題に関わる何かをノルマン・コンクエストのなかに見出してきた……歴史家たちが彼ら自身が生きている時代を解釈する方法において、これ以上重要な試金石となってきた主題はほとんどないのだ」⁴⁶⁾。

20世紀後半、イギリスはヨーロッパとの関係においてどのような態度をとるべきか、大きな方向転換を迫られ、同時にイギリスの過去に対する理解が厳しく問い直される時代を迎えることとなった。サザーンがいみじくも題した「ヨーロッパの仲間入り」という言葉は、聴衆の耳に同時代的な強さをもって響いたかもしれない。現代イングランドはノルマン・コンクエストのなかに、「ヨーロッパへの仲間入り」に直面し、判断に迷い、複雑な感情を抱きつつ進んでいかざるを得なかった過去のイングランドの姿を探っているようである。

注

- 1) 日本語では例えば、指昭博編『「イギリス」であること』刀水書房、1999年、井野瀬久美恵「「イギリス」を創り直す ブリテン、帝国、ヨーロッパ」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年など。
- 2) F. Barlow, 'William I and the Norman Conquest', *I Normanni in Inghilterra* (Rome, 1974), p.4.
- 3) D.C. Douglas, *English Scholars 1660-1730* (Westport, 1975, 1st 1939); id., 'The Norman Conquest and British Historians', originally in 1946, in: id., *Time and the Hour* (London, 1977); A. Briggs, 'Saxons, Normans and Victorians', *1066 commemoration series*, no.5 (St Leonards-on-Sea, 1966); J.M. Carter, *The Norman Conquest in English Historiography* (Manhattan, Kansas, 1980); A. Gransden, '1066 and all that Revised', *History Today*, 38(9), (1988); D.J.A. Matthew, 'The English Cultivation of

- Norman History', in: D. Bates and A. Curry eds., *England and Normandy in the Middle Ages* (London and Rio Grande, 1994); M. Chibnall, *The Debate on the Norman Conquest* (Manchester, 1999)など。
- 4) Douglas, 'British Historians', p. 57.
 - 5) D. Cannadine, 'British History as a 'new subject' Politics, perspectives and prospects', in: A. Grant and K.J. Stringer eds., *Uniting the Kingdom?* (London and New York, 1995), p. 19.
 - 6) *The Anglo-Saxon Chronicles*, ed. and tr. by M. Swanton (London, 2000), (D), 1066.
 - 7) *The Gesta Gvillelmi of William of Poitiers*, ed. and tr. by R.H.C. Davis and M. Chibnall (Oxford, 1998), pp.146-50.
 - 8) イングランド王位継承をめぐる研究は多いが、例えば G. Garnett, 'Coronation and Propaganda: Some Implications of the Norman Claim to the Throne of England in 1066', *Transactions of the Royal Historical Society (TRHS)*, 5th ser., 36 (1986).
 - 9) Gransden, '1066', p.48.
 - 10) Chibnall, *Debate*, p.19; id., *The Normans* (Oxford, 2000), p.124.
 - 11) Chibnall, *Debate*, p.29; Douglas, 'British Historians', p.58.
 - 12) Douglas, *English Scholars*, pp.119-37; Chibnall, *Debate*, pp.37-8.
 - 13) Chibnall, *Debate*, pp.30-1.
 - 14) E. M. Hallam, *Domesday Book through Nine Centuries* (London, 1986), pp.122-5.
 - 15) Douglas, 'British Historians', p.59; Gransden, '1066', p.49; Barlow, 'William I and the Norman Conquest', p.4.
 - 16) 「ノルマンのくびき」説については C. Hill, 'The Norman Yoke' in: J. Saville ed., *Democracy and the Labour Movement* (London, 1954).
 - 17) Douglas, 'British Historians', pp.59-62; Hill, 'The Norman Yoke', p.23; Gransden, '1066', pp.49-50.
 - 18) Briggs, 'Saxons', pp.10-1.
 - 19) Chibnall, *Debate*, pp.53-4.
 - 20) E. Bulwer Lytton, *Harold the last king of the Saxons* (1848); p.3. 他にも C. Kingsley の *Hereward the Wake*, A. Tennyson の *Harold* などの例がある(Hill, 'The Norman Yoke', p.56).
 - 21) 「イングランド人が誇るべき偉業」という理解を背景に、ドゥームズデイ・ブック作成 800 周年にあたる 1886 年には大英博物館、王立歴史学協会、国立公文書館など多くの団体によって記念祭が催されたのに対し (Hallam, *Domesday Book*, pp.161-3)、1866 年のヘイスティングズの戦い 800 周年は盛り上がりには欠けたようである。A・ブリッグズは、ヘイス

- イングズの戦いについて「記念する必要があるのか」という当時のコメントを紹介する (Briggs, 'Saxons' p.13)。ノルマン・コンクエストの記憶が19世紀当時の国家に直結する経験として用いられたのはイングランド側のみではない。ナポレオンはイギリス征服を計画した際、フランスの偉大な過去の業績を示すものとしてバイユー・タピストリをパリで展示させ、賞揚した (C.H. Haskins, *The Normans in European History* (Boston and New York, 1915), p.76; Chibnall, *Normans*, p.168)。ナポレオン3世はウィリアム征服王の像を建てさせ、またノルマンディではヘイスティングズの戦いの勝利、ウィリアム征服王の戴冠、没後800年がそれぞれ盛んに祝われた (Chibnall, *Normans*, p.172)。
- 22) 当時のイギリスの歴史研究について、J・ケニヨン『近代イギリスの歴史家たち』今井宏・大久保桂子訳、ミネルヴァ書房、1988年 (J. Kenyon, *The History Men* (1983))を参照。
- 23) E.A. Freeman, *The Norman Conquest*, 6 vols (Oxford, 1867-79) .
- 24) Douglas, 'British Historians', pp.63-4; W.R. Powell, *John Horace Round* (Chelmsford, 2001), chap. 6.
- 25) Briggs, 'Saxons', pp. 20-2. ラウンドの政治的立場について、Powell, *John Horace Round*, chap. 5.
- 26) Gransden, '1066', p.50.
- 27) N. Davies, *The Isles* (London, 1999), pp. 294-5; R.A. Brown, 'The Norman Conquest', in: N. Saul ed., *England in Europe* (London, 1994), pp.36-7; Briggs, 'Saxons', pp.20-2.
- 28) R.W. Southern, 'England's First Entry into Europe', in: id., *Medieval Humanism and Other Studies* (Oxford, 1970). サザーンは同時にイングランドがヨーロッパ世界に組み込まれた故に逆にイングランドとしての自己意識を成長させたと強調する。
- 29) C.H. Haskins, *The Rise of Universities* (New York, 1923); id., *The Renaissance of the Twelfth Century* (Cambridge, 1927).
- 30) C.H. Haskins, *Norman Institutions* (London, 1918); Chibnall, *Debate*, p.70.
- 31) Haskins, *Normans in European History*, p. vii.
- 32) Haskins, *Normans in European History*, pp.82-3.
- 33) D.C. Douglas, *William the Conqueror* (London, 1964). ダグラスの生涯と業績について、R.H.C. Davis, 'David Charles Douglas 1898-1982', *Proceedings of the British Academy*, 69, 1983 (1984), pp.513-42.
- 34) D.C. Douglas, *The Norman Achievement 1050-1100* (Eyre and Spottiswoode, 1969); id., *The Norman Fate, 1100-1154* (Eyre, 1976).
- 35) J. Le Patourel, *The Norman Empire* (Oxford, 1976). ただし、「ノルマン

- 帝国」という用語は、ハスキンスがすでに『ヨーロッパ史におけるノルマン人』に「ノルマン帝国」という章を設け、「アンジュー帝国」との対比からノルマンによる複数領域支配を分析した(Haskins, *Normans in European History*, pp.85-115)。
- 36) 個人の背景を研究と安易に関連づけることはできないが、前述のハスキンスもイングランド人ではなく、アメリカ人研究者であったことは興味深い。ル＝パトゥールレルの生涯と研究について、J.C. Holt, 'John Le Patourel 1909-1981', *Proceedings of the British Academy*, 71, 1985 (1986), pp.583-96.
- 37) J. Le Patourel, 'The Plantagenet Dominions', in: J. Le Patourel, *Feudal Empires* (London, 1984), VIII, pp.289-308. 彼は『ノルマン帝国』に続き、プランタジネット家支配の時代まで含んだ中世英仏史研究を意図していたが、完成することなく世を去った。
- 38) 1966年のノルマン・コンクエスト 900年に関連した出版物は、例えば *The Norman Conquest*, by D. Whitelock, D.C. Douglas, C.H. Lemmon and F. Barlow (London, 1966); C.W. Hollister, ed., *The Impact of the Norman Conquest* (1969, rep, Malabar, 1982); *The Historical Association Hastings Commemoration Lectures* (1966); R.H.C. Davis, 'The Norman Conquest', *History*, 51 (1966); R.A. Brown, 'The Norman Conquest', *TRHS*, 5th ser., 17 (1967). *History Today* 誌は1966年、ヘイスティングズの戦いの月である10月号で特集を組んでいる。また、モノグラフとしてはダグラスの前掲書に加え、F. Barlow, *William I and the Norman Conquest* (London, 1965)など。封建制論争も900周年前後に激しく行われた(青山吉信「『ノルマン＝コンクエスト』の史的意義を繞る欧米学界の新動向」『史学雑誌』75 - 1、2、1966年など参照)。
- 39) C.T. Chevallier, 'Introduction', in: *The Norman Conquest*, p.2.
- 40) H. Loyn, '1066: Should we have celebrated?', *Historical Research*, 58 (1990), p.126.
- 41) Brown, 'The Norman Conquest', p.130.
- 42) D. Bates, *William the Conqueror* (Stroud, 2001 originally 1989), pp.11-3.
- 43) Carter, *The Norman Conquest*, p.v.
- 44) W.C. Sellar & R.J. Yeatman *1066 and All That* (London, 1930, 1999), pp.24-5.
- 45) 初版は1930年だが、筆者が入手したものは1999年の印刷であり、その間何度も増刷された。T・フィッシャーによれば、1990年の段階で36版である(T. Fisher, 'Too Much of 'A Good Thing?', *History Today*, 41 (7) (1991), pp.6-7)。
- 46) Chibnall, *Debate*, p.1.

(京都大学文学部非常勤講師)